

## ユニタリ行列による三角化と対角化

正方行列  $A$  がある三角行列  $T$  と相似なとき,  $A$  は三角化可能であるという.  $T$  の対角成分を  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  とすれば固有方程式は  $F_T(x) = (x - \alpha_1) \cdots (x - \alpha_n)$  だから  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  は  $T$  の固有値であり, これと相似な  $A$  の固有値でもある [EV8]. (前の注意を証明するのは難しいが, 次の定理はそれよりは容易に示せる.)

**定理 6.5 (行列の三角化)**  $n$  次正方行列  $A$  は三角化可能, 即ち, ある正則行列  $P$  により  $P^{-1}AP = \begin{bmatrix} \alpha_1 & & * \\ & \ddots & \\ & & \alpha_n \end{bmatrix}$

と上三角行列にできる. さらに,  $P$  としてユニタリ行列を取ることができる. また,  $A$  の固有値  $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n$  は任意の順序, 特に相異なる固有値ごとに, 重複度と同じ個数だけ並ぶ様になる.

また,  $A$  が実行列で固有値が全て実数のときは  $P$  として直交行列を取ることができる.

**証明**  $n$  に関する帰納法で示す.  $n=1$ ,  $A=[\alpha]$  のときは成立 ( $P=[1]$ ).  $(n-1)$  次行列まで定理が成り立つと仮定.  $A$  の固有値を任意に取って  $\alpha_1$  とし,  $\alpha_1$  に対する固有ベクトル  $\mathbf{p}_1$  を正規化して  $\mathbf{u}_1$  とする.  $\mathbf{u}_1$  を延長して正規直交基底  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$  を作れば (定理 5.6 (シュミットの直交化法))  $U = [\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n]$  はユニタリ行列 (定理 5.9). このとき,

$$AU = [A\mathbf{u}_1 \ A\mathbf{u}_2 \ \cdots \ A\mathbf{u}_n] = [\alpha_1\mathbf{u}_1 \ A\mathbf{u}_2 \ \cdots \ A\mathbf{u}_n] = [\mathbf{u}_1 \ \cdots \ \mathbf{u}_n] \begin{bmatrix} \alpha_1 & * \\ \mathbf{0} & A_1 \end{bmatrix} = U \begin{bmatrix} \alpha_1 & * \\ \mathbf{0} & A_1 \end{bmatrix}. \therefore U^{-1}AU = \begin{bmatrix} \alpha_1 & * \\ \mathbf{0} & A_1 \end{bmatrix}.$$

帰納法の仮定により  $A_1$  には  $U_1^{-1}A_1U_1 = \begin{bmatrix} \alpha_2 & & * \\ & \ddots & \\ & & \alpha_n \end{bmatrix}$  となる  $(n-1)$  次ユニタリ行列  $U_1$  がある.

$$Q := \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & U_1 \end{bmatrix} \text{ とおけば } Q^*Q = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & U_1^* \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & U_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & U_1^*U_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & E_{n-1} \end{bmatrix} = E_n$$

より  $Q$  はユニタリ行列.  $P=UQ$  とおけばユニタリ行列の積である  $P$  もユニタリ行列であり,

$$P^{-1}AP = (UQ)^{-1}A(UQ) = Q^{-1}(U^{-1}AU)Q = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & U_1^{-1} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \alpha_1 & * \\ \mathbf{0} & A_1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & U_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha_1 & * \\ \mathbf{0} & U_1^{-1}A_1U_1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha_1 & * \\ \mathbf{0} & \ddots & * \\ & & \alpha_n \end{bmatrix}$$

より定理が示された.  $A$  が実行列のとき,  $\alpha_1$  が実数ならば,  $(A - \alpha_1 E)\mathbf{x} = \mathbf{0}$  の解である  $\mathbf{p}_1, \mathbf{u}_1$  も実ベクトルに取れるので,  $U$  は実ユニタリ行列=直交行列とできる.  $\alpha_2, \dots, \alpha_n$  も実数なら, 帰納的に  $Q, P$  も直交行列に取れる.

**[ユニタリ行列による対角化]** 内積空間では基底は正規直交基底を用いるが, その間の変換行列はユニタリ行列になる. そこで正方行列  $A$  がユニタリ行列で対角化される為の条件を考える.  $A$  があるユニタリ行列

$$U = [\mathbf{u}_1 \ \mathbf{u}_2 \ \cdots \ \mathbf{u}_n] \text{ により } U^{-1}AU = \begin{bmatrix} \alpha_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \alpha_n \end{bmatrix} =: D$$

と対角化されたとする.  $U$  はユニタリ行列なので  $U^*U = E$  より  $U^{-1} = U^*$  だから,

$$D^* = (U^{-1}AU)^* = (U^*AU)^* = U^*A^*U^{**} = U^*A^*U = U^{-1}A^*U.$$

従って, 左右より  $U, U^{-1}$  を掛けて  $A^* = UD^*U^{-1} = UD^*U^*$ .  $D, D^*$  は対角行列なので可換, 即ち,

$$DD^* = \begin{bmatrix} \alpha_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \alpha_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \bar{\alpha}_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \bar{\alpha}_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha_1\bar{\alpha}_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \alpha_n\bar{\alpha}_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \bar{\alpha}_1\alpha_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \bar{\alpha}_n\alpha_n \end{bmatrix} = D^*D$$

$A = UDU^{-1} = UDU^*$  より

$$AA^* = (UDU^*)(UD^*U^*) = UD(U^*U)D^*U^* = UD^*DU^* = (UD^*U^*)(UDU^*) = A^*A.$$

即ち,  $A$  がユニタリ行列で対角化できる  $\implies AA^* = A^*A$ .

$AA^* = A^*A$  のとき,  $A$  を **正規行列** という. 実はこの逆が成り立つことが示せる.

**定理 6.8 (正規行列の対角化)** 正方行列  $A$  について次は同値:

- (1)  $A$  は正規行列. ( $A^*A = AA^*$ .)
- (2)  $A$  はユニタリ行列で対角化される.
- (3)  $A$  をユニタリ行列  $U$  で三角化すると対角行列になっている.

**証明** (3) $\implies$ (2) は明らか. (2) $\implies$ (1) はすでに示した. (1) $\implies$ (3) を示す.

$AA^* = A^*A$  とし,  $A$  を三角化するユニタリ行列  $U$  をとる (定理 6.5). このとき, 三角行列  $B = U^{-1}AU$  は対角行列, を示す.

$B = U^{-1}AU = \begin{bmatrix} \alpha_1 & & b_{1j} \\ & \ddots & \\ \mathbf{0} & & \alpha_n \end{bmatrix}$  とすると,  $B = U^{-1}AU = U^*AU, B^* = U^*A^*U$  より,  $BB^* = U^*AA^*U = U^*A^*AU = B^*B$ .

$B^*B = BB^*$  を成分で表すと,

$$B^*B = \begin{bmatrix} \bar{\alpha}_1 & & & \\ b_{12} & \bar{\alpha}_2 & & \\ \vdots & \vdots & \ddots & \\ b_{1n} & \cdots & b_{n-1n} & \bar{\alpha}_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \alpha_1 & b_{12} & \cdots & b_{1n} \\ & \alpha_2 & \ddots & \vdots \\ & & \ddots & b_{n-1n} \\ & & & \alpha_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \alpha_1 & b_{12} & \cdots & b_{1n} \\ & \alpha_2 & \ddots & \vdots \\ & & \ddots & b_{n-1n} \\ & & & \alpha_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \bar{\alpha}_1 & & & \\ b_{12} & \bar{\alpha}_2 & & \\ \vdots & \vdots & \ddots & \\ b_{1n} & \cdots & b_{n-1n} & \bar{\alpha}_n \end{bmatrix} = BB^*$$

両辺の対角成分  $(B^*B)_{ii}, (BB^*)_{ii}$  を (1,1) 成分から順に比較する.

$i=1$  のとき: 左辺  $= (B^*B)_{11} = \bar{\alpha}_1\alpha_1 = |\alpha_1|^2$ , 右辺  $= (BB^*)_{11} = \bar{\alpha}_1\alpha_1 + \bar{b}_{12}b_{12} + \cdots + \bar{b}_{1n}b_{1n} = |\alpha_1|^2 + \sum_{j=2}^n |b_{1j}|^2$

$$\Rightarrow \sum_{j=2}^n |b_{1j}|^2 = 0. \therefore |b_{1j}|^2 = 0 \quad (j=2, \dots, n) \therefore b_{12} = b_{13} = \dots = b_{1n} = 0.$$

$i=2$  のとき:  $b_{12}=0$  より 左辺  $= (B^*B)_{22} = |b_{12}|^2 + |\alpha_2|^2 = |\alpha_2|^2$ , 右辺  $= (BB^*)_{22} = |\alpha_2|^2 + \sum_{j=3}^n |b_{2j}|^2$

$$\Rightarrow \sum_{j=3}^n |b_{2j}|^2 = 0, \therefore |b_{2j}|^2 = 0 \quad (j=3, \dots, n) \therefore b_{23} = b_{24} = \dots = b_{2n} = 0.$$

以下帰納的に  $k < i$  で  $b_{kj} = 0$  ( $k < j \leq n$ ) と仮定すると,  $j=i$  のとき  $b_{ki} = 0$  ( $k < i$ ) より

$$\text{左辺} = (B^*B)_{ii} = \sum_{k < i} |b_{ki}|^2 + |\alpha_i|^2 = |\alpha_i|^2. \quad \text{右辺} = |\alpha_i|^2 + \sum_{j > i} |b_{ij}|^2.$$

$$\Rightarrow \sum_{j > i} |b_{ij}|^2 = 0. \therefore |b_{ij}|^2 = 0 \quad (j=i+1, \dots, n) \therefore b_{i+1} = b_{i+2} = \dots = b_{in} = 0.$$

よって帰納的に  $b_{ij} = 0$  ( $i < j$ ) が示された.  $b_{ij} = 0$  ( $i > j$ ) だったので  $b_{ij} = 0$  ( $i \neq j$ ) より  $B$  は対角行列.

[正規行列の例と性質] 次の行列は ( ) 内に示すその定義により 正規行列 ( $AA^* = A^*A$ ) であることが分かる.

(1) エルミート行列  $H$  ( $H^* = H$ ). (2) ユニタリー行列  $U$  ( $U^*U = E = UU^*$ ). (3) 歪エルミート行列  $S$  ( $S^* = -S$ ).  
これらの実行列版である実対称行列, 直交行列, 実交代行列も正規行列であり, これらの定数倍も正規行列になる.  
従って, 前定理 6.8 によりこれら全てはユニタリー行列で対角化できる.

以下, 内積  $(\cdot, \cdot)$  は  $\mathbb{C}^n$  の標準内積とする.

**定理 6.9 (正規行列の固有値と固有ベクトル)**

(1) 正規行列  $A$  の固有値  $\alpha$  と固有ベクトル  $\mathbf{p}$  ( $A\mathbf{p} = \alpha\mathbf{p}$ ) について  $A^*\mathbf{p} = \bar{\alpha}\mathbf{p}$ .

(2) 正規行列  $A$  の相異なる固有値  $\beta_1, \beta_2$  に対する固有ベクトル  $\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2$  は直交する.

**証明** (1):  $AA^* = A^*A$  より  $(A^*\mathbf{p}, A^*\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, AA^*\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, A^*A\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, A^*\alpha\mathbf{p}) = \alpha(\mathbf{p}, A^*\mathbf{p})$  に注意すると,

$$\begin{aligned} \|A^*\mathbf{p} - \bar{\alpha}\mathbf{p}\|^2 &= (A^*\mathbf{p}, A^*\mathbf{p}) - (\bar{\alpha}\mathbf{p}, A^*\mathbf{p}) - (A^*\mathbf{p}, \bar{\alpha}\mathbf{p}) + (\bar{\alpha}\mathbf{p}, \bar{\alpha}\mathbf{p}) \\ &= \alpha(\mathbf{p}, A^*\mathbf{p}) - \alpha(\mathbf{p}, A^*\mathbf{p}) - \bar{\alpha}(\mathbf{p}, A\mathbf{p}) + \alpha\bar{\alpha}(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = 0. \therefore A^*\mathbf{p} = \bar{\alpha}\mathbf{p}. \end{aligned}$$

(2): (定理 6.8 より出るが, 別証明を与える.)  $\beta_1(\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2) = (\beta_1\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2) = (A^*\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2) = (\mathbf{p}_1, A\mathbf{p}_2) = (\mathbf{p}_1, \beta_2\mathbf{p}_2) = \beta_2(\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2)$ .  
 $\beta_1 \neq \beta_2$  より  $(\mathbf{p}_1, \mathbf{p}_2) = 0$ . よって  $\mathbf{p}_1$  と  $\mathbf{p}_2$  は直交する.

**定理 6.10 (エルミート行列, ユニタリー行列の固有値)** 次の正規行列の固有値について次が成り立つ:

(1) エルミート行列  $H$  の固有値  $\alpha$  は全て実数. ( $\alpha \in \mathbb{R}$ .)

(2) ユニタリー行列  $U$  の固有値  $\alpha$  は全て絶対値 1 の複素数. ( $|\alpha| = 1$ .)

(3) 歪エルミート行列  $H$  の固有値  $\alpha$  は全て純虚数, 又は 0. ( $\alpha \in i\mathbb{R}$ .)

**証明** (1):  $H\mathbf{p} = \alpha\mathbf{p}$ ,  $\mathbf{p} \neq \mathbf{0}$  とすると  $\bar{\alpha}(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (\alpha\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (H\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (\mathbf{p}, H^*\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, H\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, \alpha\mathbf{p}) = \alpha(\mathbf{p}, \mathbf{p})$ .  
 $(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = \|\mathbf{p}\|^2 \neq 0$  より  $\bar{\alpha} = \alpha$ . よって  $\alpha$  は実数.

(2):  $U\mathbf{p} = \alpha\mathbf{p}$ ,  $\mathbf{p} \neq \mathbf{0}$  とすると  $|\alpha|^2(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = \alpha\bar{\alpha}(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (\alpha\mathbf{p}, \alpha\mathbf{p}) = (U\mathbf{p}, U\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, \mathbf{p})$ .  $(\mathbf{p}, \mathbf{p}) \neq 0$  より  $|\alpha|^2 = 1$ .

(3):  $S\mathbf{p} = \alpha\mathbf{p}$ ,  $\mathbf{p} \neq \mathbf{0}$  とすると  $\bar{\alpha}(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (\alpha\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (S\mathbf{p}, \mathbf{p}) = (\mathbf{p}, S^*\mathbf{p}) = (\mathbf{p}, -S\mathbf{p}) = -(\mathbf{p}, \alpha\mathbf{p}) = -\alpha(\mathbf{p}, \mathbf{p})$ .  
 $(\mathbf{p}, \mathbf{p}) = \|\mathbf{p}\|^2 \neq 0$  より  $\bar{\alpha} = -\alpha$ . よって  $\alpha$  は純虚数又は 0.

**系 6.11** 実対称行列の固有値は全て実数.

**定理 6.12 (実対称行列の直交行列による対角化)** 実正方行列  $A$  について次は同値:

(1)  $A$  は実対称行列.  $\iff$  (2)  $A$  は直交行列により対角化できる.

**証明** (1) $\implies$ (2): 実対称行列はエルミート行列だからその固有値はすべて実数である. 従って, 直交行列により三角化出来る (定理 6.5). 実対称行列は正規行列で, 直交行列はユニタリー行列だから三角化すると対角化されている (定理 6.8).

(2) $\implies$ (1):  $A$  が直交行列  $U$  により  $U^{-1}AU = D$  が対角行列になったとすると  $A = UDU^{-1} = UD^tU$ ,  ${}^tD = D$  より

$${}^tA = {}^t(UD^tU) = {}^tU{}^tD{}^tU = UD^tU = A.$$

**注** 内積空間  $V$  上の一次変換  $f: V \rightarrow V$  は正規直交基底に関する表現行列がユニタリー行列, エルミート行列のときユニタリー変換, エルミート変換というが, 正規直交基底をうまくとるとそれらの表現行列は対角行列になる.

[三角化の応用, 行列の多項式] 一般に,  $x$  の多項式  $f(x) = a_mx^m + \dots + a_1x + a_0$  と正方行列  $A$  に対し, ( $x$  に  $A$  を代入した) 正方行列  $f(A)$  を,  $f(A) = a_mA^m + \dots + a_1A + a_0E$  と定める.  $A$  を正則行列  $P$  により三角化して  $T = P^{-1}AP$  (上三角行列) とすると,  $T^2 = P^{-1}APP^{-1}AP = P^{-1}A^2P, \dots, T^k = P^{-1}A^kP$  より,  $f(T) = a_mT^m + \dots + a_0E = P^{-1}(a_mA^m + \dots + a_0E)P = P^{-1}f(A)P$ ,  $f(A) = Pf(T)P^{-1}$ . 上三角行列の和, スカラー倍, 積はまた上三角行列で, その  $(i, i)$  成分も  $T$  の  $(i, i)$  成分の和, スカラー倍, 積になるので, 次が成り立つ.

**定理 6.6 (フロベニウス (Frobenius) の定理)**  $f(x)$  を  $x$  の多項式,  $n$  次正方行列  $A$  の固有値を  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  とするとき, 行列  $f(A)$  の固有値は  $f(\alpha_1), \dots, f(\alpha_n)$  である.

**定理 6.7 (ケーリー-ハミルトン (Cayley-Hamilton) の定理)** 正方行列  $A$  の固有多項式  $F_A(x)$  に対し,  $F_A(A) = O$ . ( $\therefore$ )  $F_A(T) = F_T(T) = (T - \alpha_1 E) \cdots (T - \alpha_n E)$  の右辺第  $i$  項は  $(i, i)$  成分が 0 の上三角行列で, 右辺の積を順に計算すると  $k$  項目迄の積は  $k$  列目迄  $\mathbf{0}$  になり最後に  $O$  になる.